

集

俳句フォーラム

2020年7月 第16号



自齒二十

平野無石

自齒二十残る八十路や雑煮食む
まだ生きるつもり的一步初詣
下り坂楽しむ齡石露の花
閻魔から逃げきし命鱻膳
国揺るがす病の行方冴返る

梅の道

都築繁子

無器用のままの一生破魔矢受く
奪衣婆の胸に一円冬ぬくし
余寒なお家族葬せし友を訪う
遠景のタワーまばたく浅き春
紅梅や行きて戻りし木の歩道

歩幅

植木やす子

雪止んで湖面に揺らぐ逆さ富士
日脚伸ぶ猫長ながと四肢のぼす
寒の明けほころび初めし小庭かな
春遅々と歩幅労りつつ伸ばす
雨戸繰るもやっと温し夜の庭

春遅々

田中藤穂

添書の幼なの言葉賀状書く
寒明けて寒きを道にいたわり合う
麻布十番花林糖固し春遅々と
料峭の道きて駅へ段下りる
二ヶ月の満月美しと告ぐ電話

A・B・C

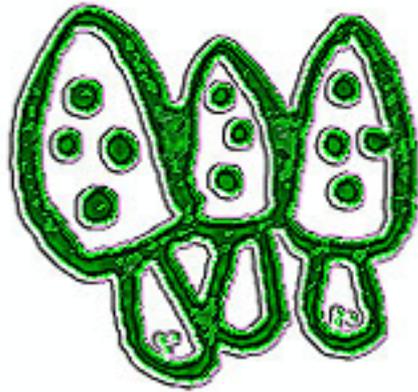
篠田純子

飛んできて膨らむすずめA・B・C
花嫁の駆け込み乗車冴返る
冬薔薇棘サボテンのごとくあり
打掛の花嫁異人黄水仙
英国大使館の庭のひろびる風薫る

居場所

大山夏子

初閨魔足裏底冷え大広間
定宿の大きな椀のしじみ汁
ねこやなぎ甕に溢るる墓ありて
膝掛や読み残したる数ページ
厄落し居場所不安な家の中





桜隠し

渡辺節子

汐風に抱かれて揺るる冬菜かな
初春と気負し今年も寝正月
雪原や夜汽車の時空ワープする
流水に揺さぶられては川躍る
蓬萌ゆ桜隠しに庇われ

葉

大山夏子

この年の干支嫁が君飾り窓
ロボットがお帰りと待つ寒満月
読みかけの葉が目立つもう二月
義理チョコてふ遠い昔やバレンタインの日
雛飾る家のどこかに妣が居て

寄生木

中川のぼる

境内に荒れ風何ぞ破魔矢買う
枯野原静寂（しじま）育くむ花芽かな
電飾を浴びる妖光雪女郎
春の闇かつて誤読の本に道
寄生木の毬際立たす春浅し

紫木蓮

江口九星

紫木蓮のつぼみふくらむ天を向き
アメ屋横丁塩鮭一本求めたり
マラーラーめ調べにふける春銀河
福を呼ぶ母の教えしいらぎの葉
この世をも無分別なる春の闇

初春

伊藤昌枝

高御座展の列初春をよろこべり
葛飾に暮らせし月日年新た
風を読みジャンプスキーヤー滑空す
蘆の芽の揃ひし中に工事船
春遅々と郷や歴史を読み返す

初富士

吉宇田麻衣

初富士の朝心に調べ湧く
干大根手塩をかけるひとときに
年新た心のひだを伸ばせたら
冬うらら幾度も出向く展覧会
節分や子育ての札届きけり

冬怒涛

楠本和弘

侘助や空堀跡の笠地蔵
煤払はやばや終へて大吟醸
都鳥木場に角乗橋遺る
冬田なか猫足早に素通りす
冬怒涛海の底なる大欠伸

群青

渡部恭子

群青の立春ペダル漕ぐ空へ
初鏡ゆるる光の耳飾り
初みくじ分相応の福という
春月夜昔話の読み聞かせ
深読みを悔い梅の香に身をゆだね

校訓

小沢えみ子

電飾の街雪催い足早に
春雨やこの頃評判パン買いに
春炬燵子に読み聞かすぐりとぐら
雛あられそのはかなさを噛みにけり
校訓は質実剛健卒業す

生き物ら

酒井たかお

トランペットの吹初透る河原かな
早春の太陽が好き生き物ら
不条理の渦巻くこの世春の闇
わが道は晴耕雨読犬ふぐり
草萌えや日が昇りくる農夫の背



円の会

風も見ず

重原爽美

庭石と共に誘う福寿草
芹の本濁ごして増える手に余る
杉の花観て居て烟る風も見ず
金縷梅や山を踏んまへ動き出す
春泥を踏むふるさととも無く寂し

いつの間に

大山夏子

窓叩く風やひとりの晦日蕎麦
初詣赤札数多仁王に貼られて
いつの間に雨から曇歸路幽し
富士の影少し離れて寒没日
卒寿まで生きるつもり初日記

菜の花

仁上博恵

医師若く初回の診察齟齬多し
ちんすこうは慰霊の土産年の暮
菜の花や海の青さを手放さず
春の海光の帯を小舟行く
春近し並木通りの喫茶店

春宵

石川東児

芋洗ふ記憶の底に撥ね釣瓶
流木の故里何処冬の浜
年の夜湯呑茶碗の罅なぞる
初漁り小鷺池畔に身じろがず
春宵の灯台の灯と街の灯と

寒の月

小笠原妙子

夢託す麒麟はいずこ寒の月
疇へと絵文字を描いて鶴戻る
亡猫がソファの隅に日脚伸ぶ
美容院の小さき雛に迎へらる
澱みたる心の襞に春月光

蜷汁

いき三柵淳

宍道湖の呼吸いきが聞こえる蜷汁
荒富士の肌はだえ冬至の陽を惜しむ
水音をたどる足音冬桜
犬ふぐり星の涙のひとしづく
花八手受話器にこもる母の声

雨降る春に

治部少輔

柚子の香や芯温めて雨の音
家移りや残る覚悟の寒紅梅
断つ捨てる難きは離る片時雨
寒雀電線地中化とまどつて
さしかけて丈の差仰ぐ春の雨

春の日に

中山未奈藻

南無妙法蓮華経みたまのひとつ春の雲
梅東風や剃り跡眩し僧急ぐ
富くじの列に並ぶや冬鴉
春を待つ水掛地藏そつと拭く
春の陽に近づきたくて坂上る

